

Mitsuharu MATSUOKA, ed.
*Evil and Its Variations in the Works of Elizabeth
Gaskell: Sesquicentennial Essays*

Osaka: Osaka Kyoiku Tosho, 2015. xxv + 539pp.
Hardcover ¥6,300, ISBN: 978-4-271-21039-9

金山亮太

このたび松岡光治氏の編集によって出された本書は、30名以上のギヤスケル研究者から寄せられた彼女の各作品（伝記や書簡も含む）に関する論考を「悪とその変奏」という共通テーマの下で包括したものである。何よりもまず特筆すべきは、その執筆者の「多様性」であろう。緒言、序文、年表などを手掛けた執筆者も加えた総勢16か国35名の内訳は以下の通り。日本13、アメリカ4、イギリス3、カナダ2、あとはロシア、フィンランド、ポーランド、ドイツ、フランス、イタリア、韓国、中国、台湾、シンガポール、オーストラリア、ニュージーランドが各1。このように見てみると、アフリカおよび南米からの投稿がないとはいえ、英語圏の国々だけでなく広くヨーロッパ、アジア、オセアニアから論文が寄せられていることが分かる。松岡氏の人脈の広さがこのような幅広い執筆者を集めることを可能にしたことは言うまでもないが、異なる地理的・社会的・文化的背景を持つ執筆者が、ギヤスケル作品を舞台にして、「悪」という普遍的なテーマに対してどのような視点から挑んだかという点が本書の最大の興味である。

ニーチェによって神の死が宣告されてから130年あまり、善と悪の境界は曖昧になるどころか、今や悪と善は混然一体となり、善が悪に、悪が善に入れかわる状態となっている。テロの脅威におびえつつ生きる21世紀のわれわれが日々感じている不安は「悪」の顕在化ではなく、「悪」が不可視化されていることに原因がある。何を善とし悪とするのか、価値観が動揺していることによってもたらされる混乱は、人々から冷静な判断力を奪い、脊髓反射的な行動を取り、刹那的な欲望に翻弄されることを可能にしてしまう。正しくあることへのこだわりが究極の大量虐殺につながり、自身の価値観に固執することが他者への排他的な攻撃を生むことを経験してきた現代のわれわれにとって、実は本書のテーマは今日のかつ極めて切実なものな

のである。

幾人かの執筆者がカントを引用して議論を補強していたことから明らかなように、悪に関わる議論は本来哲学的思想を背景に持つべきものであり、現象面としての悪にのみ目を奪われると、表面的な作品解釈に終始してしまう恐れがある。本書においてはそのような初歩的な誤謬を犯した執筆者はおらず、各自の作品に対する取り組み方はそれぞれユニークなものであり、それがこの書物を読み応えのあるものになっている。一方、悪を論じるとなれば、それと対をなす善に対する執筆者各自の考え方が浮かび上がってくるのが期待されるが、この点に関しては執筆者の中に温度差があった。例えば、作品の中の悪を論じながら、結果的に今日のわれわれを取り巻く世界が善悪の差を明確にし得なくなっていることに言及する者もいたが、一方あくまでもヴィクトリア朝社会の悪の一側面とギヤスケル作品との関連を論じることに終始する者もいた。その議論の優劣とは無関係に、このテーマの奥行き深さと取り扱いの難しさを感じさせられた。

ディケンズの初期の作品に見られるような単純明快な悪役はギヤスケルの作品には登場せず、むしろその人間的弱さや社会構造の歪みが登場人物を悪の立場に追いやる、という大雑把な印象を評者はこれまで持っていたが、今回この論集によって取り上げられた悪の諸要素も、やはり作品の内部にある、顕在化した悪の要素に注目しているものと、作品の背後に潜む、読者はおろか作者自身すら自覚していなかったであろう目に見えない悪の姿に焦点を当てたものが多かったように思う。32編の論文の内容を全部適切に要約するだけの力量を評者は持ち合わせていないが、各作品に関する議論をできるだけ簡潔にご紹介したい。

Veronica Hoyt が指摘するのは *Mary Barton* の中で殺人を犯すジョン・バートンに過激な行動をとらせた原因が、綿貿易の成否によって一喜一憂しなければならなかった当時のマンチェスターの不安定さであるが、そもそも当時のイギリスの貿易構造が、当時のイギリス人読者に当然視されていたものの、今日の脱植民地主義的観点からは看過しえない植民地経営という悪を前提にしているものだったということである。Fang Li は資本家階級が労働者階級の置かれている過酷な生活状況に無関心であるという一種の不作為が、結果的にこの作品における暴力の根底にあることを主張する。この問題をさらに突き詰め、ジョンの自己疎外という形に結実させた Francesco Marroni の議論は、存在論的孤独という副題にその狙いが顕著に表れており、社会学的な視点の有効性を際立たせている。

主人公の人間的弱さが結果的に周囲の人々の不幸を招来すると言う Thomas

Recchio の *The Moorland Cottage* 論は、作品の内部にある悪の部分を適切に腑分けしたお手本の如き論考であるが、その後続く *Cranford* 論においても、作品に内在する悪の諸要素の本質を突く議論が見られる。ギヤスケルが幼少期を過ごしたナッツフォードをモデルとしていると思しきこの愛すべき中編小説は、その牧歌的な場面設定にも関わらず、様々な悪の要素の脅威にさらされていることを3人の論者は異なる視点から指摘する。宮丸裕二氏はお金の問題を巡って克蘭フォードの社交界で暗黙裡に受け入れられている規則こそが、かえって主人公マティの孤立を招くことを論じ、Emily Morris は人間関係における距離感の取り方の誤りが問題を引き起こす過程を指摘する。Mark Weeks は人の生が一時的なものであること（＝生は死と隣り合わせであること）という普遍的な真理こそが人々を不安に陥れ、万事がスピードアップしつつあったヴィクトリア朝においては、差し迫る死への恐怖が田舎町にすら伝播しつつあったことを論じ、その解消法としての笑いの効能を示唆する。作者が最も愛した作品である『克蘭フォード』にこれほど多様な悪の側面が見られることと、本作には「ポプリの香りがする」(M・アロッド)と称されることの奇妙な符合を、評者はこの点に見たような気分になった。

Ruth はシングルマザーを主人公にしたことで、ユニテリアン派の牧師を夫に持つ作者の社会的地位を一時的に危うくした作品であったが、すでに *Mary Barton* の中にも娼婦を登場させていた作者の問題意識からすれば、当時の女性にとって最も切実かつ身近な悪の要素を避けて小説を執筆することなど論外だったろう(ただし、自分の娘たちにはこの作品を読ませなかったというあたり、彼女が置かれていた立場の複雑さを物語ってはいるが)。Andrzej Diniejko はこの「墮ちた女」の問題を正面から取り上げてはいるが、女性という「性」の弱さではなく、そのような犠牲者を構造的に生み出すヴィクトリア朝社会にこそ問題があるという、いささかありきたりな結論に至っている。それとは対照的に川崎明子氏は、「病」というある意味では典型的な悪が、その作用によってむしろ登場人物たちを同じ地平に立たせることに注目することで、その積極的な面を指摘しており、その斬新な切り口に感心させられる。同様に E. Holly Pike も、悪を避けることではなく、むしろ悪を直視することによってしか問題は解決しないことを主張するために、女を誘惑する男という問題と、病気の伝染という問題をアナロジーで捉えるという視点を提供しており、極めて刺激的である。どうやら、「墮ちた女」について論じようとすると、男性論者の旗色が悪いような気がするのは評者だけであろうか。

このように、表面的には悪と思われる要素は視点を変えれば幸いをもたらすもの

になるという議論は、次作の *North and South* 論にも見られる。たとえば Christine Huguët は、主人公マーガレット・ヘイルの高慢さとその父リチャードの信仰上の迷いが、結果的に彼らの視野を広げ、他者との融和の機会を提供すると主張する。同様に Mary Haynes Kuhlman もこの作品に描かれる不和や欺瞞性などといった悪の諸相を指摘しつつも、それらを最終的に克服する主人公たちの成長に焦点を当てた議論を展開しているし、松岡光治氏も物事には必ず良い面と悪い面があるという観点から、相手を拒絶し分断し合う態度が悪を生むのであり、互いに理解しようとして歩み寄ろうとすることこそ善への一步であると示唆する。いずれも本作のタイトルが示唆する通りの読みを展開していると言えようが、その一方で、ギヤスケルに社会小説を書かせようとした *Household Words* 誌編集長ディケンズの術中にはまったかのような気分にもさせられる。というのも、評者自身はギヤスケルの代表作ということになっている本作が、あまり彼女らしからぬ作品、すなわち職業作家としての意地にかけて編集長の強権的態度に反抗しつつ、週刊連載という過酷な条件の下で書かれた作品であるせいか、本来の伸び伸びとした筆致が見られないような気がするからである。

The Life of Charlotte Brontë に関する3本の論文はいずれも日本人研究者の手によるものであるが、その方向性が全く異なっており、いささか戸惑わされる。まず大野龍浩氏は、自家薬籠中の物としておられるコーパス言語学を応用したデジタル人文学の一例を本作において展開すべく、home という言葉が伝える言外の意味の種類を統計処理することで、ハワースの牧師館がシャーロットにとって多義的かつ矛盾する意味を持つ場所として認識されていた可能性を明らかにする。このように書けばなるほど、と首肯される向きもおられるだろうが、本書の統一テーマであるはずの「悪とその変奏」とこの分析結果とがどのように関わるのかは不明である。評者は大野氏の言う「保守派の伝統批評家」の一人かも知れないので、この種のデータ解析の有用性は認めつつも、その議論が作品解釈にどのように新しい光を当ててくれるのかをこそ知りたいと願うものである。続いて楚輪松人氏はこの伝記に対する評価が時代とともに変わったことに言及しつつ、シャーロット自身を苦しめたのは当時の桂冠詩人サウジーの無神経な一言（「文学は女の仕事ではない」）だけでなく、実は伝記作者ギヤスケル自身もその片棒を担いでいた、と指摘する。彼女がシャーロットの作家としての生き方を容認していなかったことは、書簡などに現れた彼女の女性観に明らかであり、その人生を再構成する際に彼女の価値判断を紛れ込ませることでその全体像を狂わせた、というのである。もしもそのような書き方に

なったとすれば、むしろ彼女の方がこの早逝した同性作家に対して適切な距離を取れなかったからであろうと評者は推察する。事実、シャーロットのことを必要以上に被害者として描き出すために、彼女の周囲の人物が過度に冷酷に描かれているという評価は当時からあったものの、よもやギヤスケル自身が「女はやはり妻として、母として、文学以外に家庭内でやるべきことがある」という当時の一般論を、死の前年まで独身であったシャーロットに適用したとは考えにくい。そもそも作者自身、ヴィクトリア朝の女性作家として、そのような社会通念に苦しめられていたのではなかったか。一方、田村真奈美氏はまさしくこの部分、すなわちギヤスケルがシャーロットを被害者として描きたいあまりに、彼女の周囲の人々を陰画として用いたことにより、かえって騒ぎを大きくしてしまったことに触れ、シャーロットに過度の感情移入をしてしまった点に彼女の弱さを見ており、先の議論とは好対照である。

My Lady Ludlow を扱った Shu-Chuan Yan の論考は、因習的な階級意識に囚われている上流階級の主人公が、労働者階級の人々が識字能力を持つことによって自分たちの安定的な地位が脅かされることをひそかに恐れている様子を見事に暴き、爽快感があるが、その次の *Sylvia's Lovers* になると、このような明快な議論は成立しにくくなる。なぜならば、ギヤスケルの後期の作ともいえる本作は、作品の舞台は 19 世紀初めの捕鯨町という歴史小説の枠組みを持っているにもかかわらず、ヴィクトリア朝の栄光に陰りが見え始めた 1860 年代を象徴しているかのような複雑さを内部に抱えているからである。内向的な主人公、無知で無邪気な女主人公、そして彼女を夢中にさせる、主人公とは対極にあるような「女たらし」のライバル、という図式自体はメロドラマ的ですが、目新しくも何ともない。問題は、主要な登場人物だけでなく脇役までもが何らかの形で人間的不完全さを備えており、その悪の要素が絡み合っただけで物語を構成する点である。木村晶子氏はまさに中心人物 3 人の未熟さに焦点を当て、それぞれが持つ欠点もたらす禍について論じており、一方、Pirjo Koivuvaara は飲酒の悪に焦点を絞って論じつつ、結果的にギヤスケルの他の作品にも見られる飲酒の表象とそのイメージの変化にまで議論を広げ、この社会悪の根の深さと問題の奥行きを感じさせる。玉井史絵氏はこの作品の悲劇性の原因を強制徴募隊による暴力的な徴兵行為に求め、国家の個人に対する暴力と、男性の女性に対する暴力をアナロジーで捉え、さらに本作執筆当時にアメリカで起こっていた南北戦争の一因としての奴隷解放運動との関連にも言及し、権力が一握りの為政者から一般大衆へと移行しつつある時期に起こっていた権力闘争の図式を見ようとする。本書の中の白眉と言ってよい、極めて示唆に富む論考である。

このように自分自身の言葉で問題意識を明確にした論文は知的興奮を覚えさせるものであるが、残念ながら Anna Koustinoudi が扱う *A Dark Night's Work* 論は、借り物の概念が目立ちすぎて結論が見えてこない。フロイトやラカン、クラインなどの心理学概念を援用して本作の背後にある社会対家庭という大きな図式を浮かび上がらせようとしているのだが、その前に主人公である弁護士 Edward Wilkins に劣等感や疎外感を味あわせることで彼を飲酒、さらに殺人に走らせることになる上流階級の悪や、金目当てに彼の娘に近づく Ralph Corbet の体現する世俗的な悪を分析するという手続きを欠いているために、抽象的な議論に終始しているような印象しか残さない憾みがある。同じように *Cousin Phillis* を論じた Lizhen Chen も、自分自身の問題意識を先鋭化させる前に、論点を十分に整理しないで文章を書き起こしているような印象がある。本作の主人公 Paul がいとこである Phillis の美貌や体格に対して抱いた劣等感を隠蔽するために、善意の第三者として振る舞う語り口に対する違和感を覚えているような口ぶりなのだが、それを証明するでもなく、末梢的な主張の補足に次ぐ補足ばかりで本論が進まず、その方向性が明確にならない。いずれも、自分の制御能力を超えた議論に取り組んでしまったための自滅のように見えてしまう点が惜しまれる。同じ *Cousin Phillis* を論じても、波多野葉子氏は 19 世紀に入ってイギリス社会において反カソリックの風潮が和らいだせいで英国国教会の中にハイ・チャーチ（アングロ・カソリック）の勃興が見られたことを踏まえ、ギヤスケル自身のキリスト教観の揺らぎを指摘する。作者が当時感じていた宗教的動揺と、フィリスを翻弄する鉄道技師 Holdsworth がカナダでフランス系移民の女性（おそらくカソリック信者）と結婚することで彼女を絶望させることとの間にアナロジーを見ることで、一見すると無関係に見えるヴィクトリア朝後期の宗教観の変遷や反ドグマチズムの動きがダーウィンの『種の起源』の出版を可能にしたことを気づかさされ、知的興奮を覚える。また、矢次綾氏は本作の主人公たちの言動の中に「眠れる美女」の物語パターンを見、そのようなお伽話と現実の区別がつかない愚かさが彼らを自らの未熟さの犠牲者に行っていることを論じており、示唆に富む。フィリスは既に成熟した肉体を持ちながら子供向けの前掛けエプロン（pinafore）を身につけることを強いられており、彼女が家を離れようとするに強い不快感を訴える父親は、いつまでも彼女を家の中に縛り付けようとするお伽話の中の親のイメージに重なるという指摘は大いに納得させられるものであった。

ギヤスケルの未完作 *Wives and Daughters* は、オースティン的な風習喜劇へと回帰するかのような要素を持ちながら、さらに社会悪への新たな視点も感じさせる作品

である。本作を論じた3人の論者のうち、新井潤美氏は、主人公 Molly Gibson の継母となる Hyacinth Clare に焦点を当て、その俗物性を存分に描き出し、その影響を受けた実の娘 Cynthia が言い寄られる男たち全員に媚態を示す醜悪さを暴き出す。かつて *Cranford* ではタウン・アンド・カウンティ銀行の倒産が町に騒動をもたらしたが、本作ではスノップの自己中心性が田舎町の秩序を揺るがす。*Cranford* には Miss Jenkins に代表されるような、それこそ elegant economy という名の「やせ我慢の美学」を説く人物がいたが、本作に置いては「人生万事金の世の中」がモットーになってしまっており、そのあられもない剥き出しの欲望に周囲は辟易させられている。鈴木美津子氏は作者よりも一世代前に活躍した Maria Edgeworth の Helen (1834) との類似点に着目し、ルソー流の教育（「女は可愛くて無知であればよい」）を受けた女性が、その被害者として社会に害悪をもたらす様子を描き出す。自分の言葉を持たず、相手に迎合するような生き方を期待されて育てられた女たちは、結果的にその無知、無責任によって自らの首を絞めることになるというメッセージは、男性中心社会への異議申し立てと適切な教育を女性にも施す必要性の主張として、常に女性から唱え続けられていたのである。Tamara Wagner は本作において鍵となる人物として上昇志向の強い不動産屋 Robert Preston を挙げ、これ以外にも Molly と Cynthia に言い寄る様々な男たちの中で、彼が体現する悪の特異性について論じる。愚かな女たちの存在を前提として生息できる男の一つの類型を示していることを指摘している点で、この作品における悪の要素に新しい視点を提供している。

短編小説を担当した Anne Enderwitz、Felicity R. James、Rebecca Styler、Elmira Vasileva は、それぞれ「悔悟の念」、「過去と現在の連続性と断絶」、「親子関係の中の害悪」、「歴史を舞台にした作品中の語りの問題」を切り口にしてギaskellの短編に対して解釈を挑んでいる。扱っている作品に重複は少ないものの、同一作家の作品である以上、似たようなテーマの作品が出てきてしまうのは致し方なく、本来ならば一本の論文として独立して論じられるべき作品まで類似のテーマであるという前提でまとめられているところもあり、少々もったいない感じがしたことを申し添えたい。最終章はギaskell夫人の書簡に見られる「美しいもの、便利なもの」への好みが決して偏頗なものではなく、彼女の職業作家意識や宗教観と矛盾しなかったことを証明し、宗教的動揺の時期にあっても決してぶれることのない信仰を彼女に保たせたことを大田美和氏が論じている。Florence Nightingale や Mrs. Stowe などといった一流の女性との交流だけでなく、年下のアメリカ人男性 Charles Eliot Norton との長年の交流の記録からも、彼女がヴィクトリア朝の女性像を体現しつ

つも、決して時代に埋没しない確固たる個性の持ち主であったことを証明して本論は閉じられる。

駆け足で本書の内容を紹介してきたが、これだけ浩瀚な書物をまとめ上げた松岡光治氏の問題意識が「暴力」「悪」といった負の側面を持つものであることに今さらながら興味をそそられる。ヴィクトリア朝がイギリスの栄光の時期であるからこそ、その光を際立たせる背景となる闇の部分に注目した結果、これらのキーワードが出てきたのであろうと推察される。しかし、その光と闇は同一空間の中に共存し、当時の人々を翻弄していたに違いなく、それはちょうど現代に生きるわれわれが日々感じている、善悪が混沌として不可分に思える感覚と似ていたに違いない。今から百年後の人々が現代のわれわれが残した文学作品の中からどのような「暴力」「悪」の要素を見つけることになるのか、それはどう表現されることになるのかについて想像を逞しくしたい願望に誘われたことを末尾に記したい。

(立命館大学教授)